



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	印刷ニュース媒体としての近世ドイツ語圏パンフレットについて
Author(s)	江口, 豊
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 31, 77-92
Issue Date	2020-12-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80357
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_Eguchi.pdf



印刷ニュース媒体としての 近世ドイツ語圏 パンフレットについて¹⁾

メディア・コミュニケーション研究院 教授

江口 豊

江口

豊

EGUCHI Yutaka

On the german pamphlets in the 16th and 17th century as a printed news media

EGUCHI Yutaka

abstract

In addition to flyers and Messrelation, decades later also to newspapers, pamphlets of the 16th Century can also be characterized as a printed news media. Some told stories and others conveyed news in the broadest sense. Wilhelm (1996) and other scholars argue that some lists of "text sorts", "text types" or genres etc. are necessary to clarify the characteristics and functions of pamphlets.

In this essay ten pamphlets of the Gustav-Freitag-Collection of the University of Frankfurt are examined on a trial basis. Some texts are characterized as news, but others as stories, similarly to a literary piece. Pamphlets as street literature for the masses could evoke varied images in individual minds, while flyers made a strong but relatively homogenous impression on readers through illustrations.

0 序

歴史的に見たパンフレットの機能は、情報伝達というよりも、主義主張を言語化したものに多くの注目が集まり、主として「説得」に代表されるさまざまなレベルの「要求」を意図した、広義の言語行為であるとの見方も可能である（江口2019b）。しかし、パンフレットのすべてが、いわばテキストによる議論で主張を展開したものと了解できるわけではもちろんない。そうした関連でKöhler（1976）は、パンフレットの概念を形式と内容、機能など様々な視点から規定しようと試みたがうまくいかないことを認めている。とくにパンフレットの機能については効果（Wirkung）という基準を立てて、「読者に何らかの影響を与えるという意図」をもつことを説明として与えているが、即座に「刊行の目的が純粋な事実情報や経済的広告だった」りする例も挙げているほどである（Köhler 1976, 47f.）。

フランクフルト大学図書館に所蔵されているグスタフ・フライタークコレクション（Gustav Freitag Sammlung）は¹⁾、チラシ370点の他に総数6,265点に及ぶパンフレットも含んでいる（以下フライタークコレクションと略称）。このコレクションの内訳を1925年刊行のカタログに整理したHohenemser²⁾は、コレクションのパンフレットを24のカテゴリーに下位区分している。24の範疇のうち11番目と12番目は、それぞれ「ドイツの最新の政治的出来事とニュース」、「外国の政治的出来事とニュース」と題されている。だが、これ以外の範疇でニュースと考えられるものが存在しないわけではない。実際、パンフレットの多くがタイトルの一部にドイツ語のBericht（報告）、Relation（知らせ）、(neue) Zeitung（ニュース）、Beschreibung（記述）、Geschichte/Erzählung（話/語り）などの表現を含んでいる。後に取り上げるが、例えば10番目の範疇として「学校、一般向け教育、軍紀」が立てられているが、ここにはイエズス会の年次報告を基にしたとされる日本に関するテキストも含められている（カタログ番号1464、1481、1483、1488、1519）。そのうちのカタログ番号1464は、ルイス・フロイスがイタリア語で記したイエズス会報告2年分のテキストを独訳し、アウクスブルクで1585年に刊行したとされるものである³⁾。こうしたテキストは当然のことながら、イエズス会による日本布教が成功裏に達成されていると主張する一面もあるが、同時に当時ほとんど情報が無かった日本という未知の外国に関する紹介の性格をもち、事実関係を伝えるという機能も果たしていると考えられる。他のパンフレットでは情報伝達以外に性格付けが難しいものもある。その意味では、1605年に印刷新聞が成立する以前の時代にあって、パンフレットが情報伝達メディアとしての側面をもっていた証ということもできる。先に挙げた日本に関するパンフレット4点は、イエズス会の報告を基にしているとはいえ、詳細な報告だとも言える。フライタークコレクションの10番目と11番目の範疇についても、ルターテキストなど16世紀前半の宗教論争に関するものを除き、16世紀から17世紀への転

▶1 日本の瓦版研究者小野秀雄は『かわら版物語』（1970, 1）のはしがきで、グスタフ・フライタークコレクションをドイツで見ようとして果たせなかったことを紹介している。

▶2 Hohenemser, P. (1966) Flugschriftensammlung Gustav Freitag. Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim.

▶3 ここで取り上げたパンフレットの内容とフロイスのイタリア語でのイエズス会への報告自体との異動については確認できていないが、情報の受け手がイエズス会の本部であるか一般の読者であるかということを想定すれば当然内容が異なることは予想される。

換期に焦点を当てると、ケルン戦争や各地の反乱に関するパンフレットも多数見られる。外国に関するニュースをまとめたと言われる11番目の範疇のパンフレットを見ても、フランスのユグノー戦争やトルコ戦役に関する事件が数多く取り上げられている。

小論では、先に江口（2019b）で概要を紹介した16、17世紀ごろのドイツ語圏のパンフレットについて、即時性についてはやや不明瞭ではあるものの、情報伝達が中心的機能だと了解できるパンフレットの実例について、日本をテーマにしたものも含め、その概略や特徴を紹介し、新聞が登場する以前の時代におけるパンフレットの情報伝達メディアとしての側面について検討する。さらに、受容の問題の一要素である価格に関する先行研究を紹介して、再検討してみたい。

1 情報伝達を目的としたパンフレットの具体例

冒頭で紹介した通り、情報伝播を主目的としたと考えられるパンフレットも多数存在する。そうしたなかには、16世紀、17世紀に日本のような遠方の未知の地域や国について記述したもの、当時の感覚ではという限定がつくであろうが、国内外の最新の重大事件を伝えるパンフレットがあり、そうしたもののなかからいくつかに着目する⁴⁾。これらは、フライタークコレクションの「ドイツ国内ニュース」、「海外ニュース」などの部門に収められたものである。尚、パンフレットに明確で簡潔なタイトルがある場合はまれであり、第一ページ全面に長々と事件の概要を記し、タイトルとしたものがほとんどである。そのため以下の記述では、フライタークコレクションのカatalogとして知られたHohenemser（1966）の登録番号とそこに付された記述を一部簡略化したものなどを挙げておく。小論で取り上げるテーマは、オスマントルコ軍によるウィーン包囲戦、ケルン戦争、フランスにおけるユグノー戦争、日本である。

1.1 トルコ軍のウィーン包囲戦

オスマントルコ軍は、幾度かウィーンを目指して攻撃を繰り返している。そのなかでも1529年と1683年の二度、それぞれ3週間および8週間ハプスブルク家のおひざ元の都市を包囲したが、陥落には至らなかった。この二回の包囲戦について、フライタークコレクションにもいくつかのパンフレットが収録されている、1529年の包囲戦については、カatalog番号1644番「トルコ軍によるウィーン市包囲」と題されたものがある。このパンフレットの構成は、表紙ページにタイトルとトルコ兵のイラスト、2ページから6ページまでが本文となる。6ページを除き、各ページは項目ごとの記載となり、各ページ5項目から7項目の出来事で構成されている。最終ページのみ3項目構成でページ後半部分は空白となっている。この項目別記述が、実は日付を追っての戦況

▶4 グスタフ・フライタークコレクションについては、時間的制約からごく一部となったが、2020年2月3日から3日間フランクフルト大学図書館グスタフ・フライタークコレクション閲覧室にておよそ450年前に印刷されたオリジナルを閲覧する機会を得た。閲覧や資料コピー提供の便宜を図ってくださった同閲覧室スタッフの方々にこの場を借りてお礼申し上げたい。

報告、戦闘報告となっている。9月17日から10月19日までの間、個別の戦闘行動とその経緯や場所、双方の参戦兵力、損失などが、多くの場合時間経過を付して記述されている。最終日の10月19日の項目では、「10名の歩兵が一頭の大きな駱駝を町に持ち込んだ」り、「軽騎兵たちが近郊のラハという村で基督教徒の女性や子供を連れていたトルコ兵を殺して、その馬を町に持ち帰った」などの記載で締められている。このパンフレットの記述方式は、さまざまな出来事を時間軸に沿ってできるだけ克明に記したもので、まさに報道といってもよい内容である。

これに対して、1683年のウィーン包囲戦に関するパンフレットの例として、カタログ番号1838のパンフレットを紹介する。こちらはポーランドの商人で通訳でもあったFrantz Koltshitzkyという人物に関する文字通りの英雄談である。このパンフレットは、表紙に続き2ページに読者に向けた語り掛けの文章、3ページ、5ページ、6ページまで文章が、4ページにはKoltshitzkyがトルコ人の服装を纏ったイラスト、7ページ目にはほぼ2ページ分の大きさの折り込み地図（当時の両軍の配置を描いたもので地図の裏は空白）、9、10ページに再度文章が続く構成となっている。内容は主人公が、外部から包囲されたウィーン市内にトルコ民間人に扮して入城し、重要な援軍に関する情報を伝え帰還したことであり、いわばスパイとしての活動を記述したものである。このパンフレットはニュースともいえるが、いわば人々の興味を引き付ける読み物とも理解できる。

1.2 ケルン戦争

この出来事に関するパンフレットのうち二点を紹介する。カタログ1602番、*Newe Zeitung. Darinn vermeldt wer/Den allerley Sachen / Von dem Cöllenschen Krieg. Sampt Erzelung der belegerung und eroberung des Schlos Godiss=berg/ Und Innemung der Statt Bon.* このパンフレットは、タイトル表紙とその裏が空白で、3ページ以降14ページまで印刷されている。本文は基本的に32行構成で、最終の14ページのみ10行である。1584年1月23日マールブルクで刊行されたことが明記されている。カタログにはAugustin Kolbの著者名もある。記述内容は、選帝侯かつケルン大司教となり、その後プロテスタントに改宗したGebhard Truchsess von Waldburg-Trauchburgを巡る戦争の一部を記述したものである。文中で、カトリック側の戦闘員であったスペイン兵、ベルギー兵の悪行、残虐ぶり（殺人、婦女暴行、略奪など）を詳述しているが、注目に値するのは、戦闘行動の記述にはやはり時刻や兵力が詳しく記述されている点である。類似のタイトルをもつカタログ番号1597のパンフレットの場合、著者名もしくは発行人名Nikolaus Schreiberや発行地Kölnが明記されていて、内容は具体的な事実関係の記述がなく、ケルン大司教という地位が神聖ローマ帝国内でもつ意味や新旧両派に関する概説めいた文章である。これはあきらかにニュースとは言えそうにない。ところがこのパンフレットのタイトルにも*Newe zeitung*（新たな知らせ）というニュースを謳ったタイトルが付されている。

1.3 フランスのユグノー戦争

フランスで16世紀に断続的に行われたユグノー戦争はカトリックとユグノーとの宗教対立にフランス王権を巡る争いも絡んだ政争ともいえる。8次に亘る争いでもっとも知られている事件は1572年8月に発生したサン・バルテルミの虐殺であるが、以下のパンフレットは、1589年12月にカトリック側のリーダーと目されていたギーズ公アンリとその兄弟であるロレーヌ枢機卿ルイがプロアで殺された事件を報じた内容となっている。カタログ番号1767のこのパンフレットは表紙タイトルに続き、2ページは空白、3ページから7ページまでが本文、8ページも空白となっている。表紙ページには、「昨年12月に起こったこと、フランス語から翻訳された」ことが、7ページには本文終了後にニュルンベルクのLeonhard Heuslerにより印刷されたことがそれぞれ明記されている。記述の構成は、最初に事件前夜の情勢を述べ、ユグノーとカトリック両派がプロアに集められた経緯から始まり、殺害の様子も描写されている。事件後の遺体の処理や埋葬の拒否などについての記述があり、両派の対立の様子を象徴的に示している。これに対するカトリック側の反応として、パリ市民の国王に対する反発行動（紋章の棄損や破棄など）と国王退位を求める動きも、カトリック側の兵力の準備状況やパリ周辺の情勢と併せて記述されている。さらには、これに反対するユグノー派のこれに対する兵力増強や軍資金の備え、スイス傭兵動員の動き、ユグノー派の集結とその覚悟を象徴するような逸話も紹介されている。また、アンボアーズ城に連行された人物名もわざわざ一覧として挙げられ、最後に事件全体の性格付けも試みて記述を終えている⁵⁾。このパンフレットの内容もニュースとしての側面が中心と考えてよさそうである。

▶5 これに対してカタログ番号1732のパンフレットでは、冒頭から結婚式に出席する諸侯の威光を象徴するような護衛の騎馬の数の描写が延々と続き、結婚の祝宴から殺戮に移行する様子がかなり詳細に記述されている。さらに、実行の日付、時間帯、被害者数、帰属する社会層（新教派）などの諸点について具体的に記されている。詳細な事件報告という面と物語りとしての面の共存という印象が強い。構成は、タイトル表紙の後、2ページから7ページまで1ページ当たり28行（最終8ページのみ17行）の分量でテキストが形成されている。

▶6 天正遣欧使節については同じ印刷人Michael Mangerによるチラシ（京都大学図書館にも所蔵）が印刷されている。江口(2018)注5参照。

1.4 日本をテーマとしたパンフレット

Hohenemserの作成したフライタールコレクションのカタログには巻末に索引も添えられている。その中でJapanの項目を見ると全部で7点のパンフレットが該当することが分かる。以下に、オンライン上でデジタル化されて閲覧可能なもの4点に限って紹介してみたい。ただし分類範疇としては10番（5点）と11番目（1点）に分かれている。

『王国であり諸侯領でありニッポンと呼ばれる新たに発見された島々、基督教に改宗し、神聖なる教皇により、神聖なる教会に従う者とし、その使者とにまつわる、真実で永遠に記憶すべき話』（1585）カタログ1585番 ミヒャエル・マンガー印刷⁶⁾ アウクスブルク帝国皇帝陛下の許可なく複製禁止

このパンフレットは、冒頭に天正遣欧使節のローマ派遣の様子が紹介され、大友宗麟（洗礼名フランシスコ）、有馬晴信（同プロタジオ）、大村純忠（同バルトロメオ）の3名のキリシタン大名から遣欧使節に託されたとされるローマカトリック教会や教皇に忠誠を誓う内容の書簡、長文の祈願（Oration）、そしてその祈願に対する教皇庁（教皇に代わってAnthonius Buccapadaltus名で）からの返答、最後に遣欧使節が暇乞いをして帰国する次第の描写で構成されている。尚、帰国の際には、ちょうど教皇に選出されたばかりのシクストゥ

ス5世から少年たち各人に三百クローネンの価値のある金の鎖や路銀として三千クローネンが授けられたことなども記されている。

『日本に関する二つの新しい年次報告 一つは、1595年に主のワイン山で行われた恐るべきこと。二つ目は、関白殿とその従者たちの恐るべき死について』(1598)

カタログ1464番 イタリア語からのドイツ語へ翻訳 イエズス会神父ルイス・フロイス著 選帝侯都市マインツのヨハネス・アルビヌス印刷

本パンフレットはイエズス会の年次報告を内容として謳っているため、当然日本での布教活動の諸事情を記述したものとなっている。そのひとつひとつを見ていくと、キリシタン大名といわれる人々(高山右近、筑前の黒田孝高)、細川ガラシャ、またクリスチャンの弾圧にも触れている。当然ながら一般的な政治情勢についても、関白豊臣秀次の謀反の疑いによる切腹などの大事件がタイトルになっている。また、当時すでに存在していた盲人の検校やその悪行に関する記述も見られる。後半は歴史的な重大事件である豊臣秀次が謀反の疑いで眷属ともども豊臣秀吉に殺された次第を仔細に語った内容となっている。

『ゴアに向かう航行、彼と彼の仲間の身にかかったことを語る回状 現在基督信仰が日本や中国でどうなっているのかの簡単な報告とともに』(1620) カタログ1488番 ラテン語からの翻訳 イエズス会士ニコライ・トリガウトゥス Peter von Brachel印刷(ケルン)

このパンフレットも、イエズス会士の報告をベースにして独訳されたものである。1618年にポルトガルのリスボンを出発した日本と中国への宣教に向かう船団、イエズス会士の総数(この時は中国布教班が¹10名、日本組が²12名)、国籍構成(ポルトガル10名、イタリア3名、ドイツ4名、オランダ5名)などのデータも記されている。また、遠路の航行の厳しさも赤道通過後12日間で5名が死亡したこと、著者自身も重病となり病者の塗油の秘蹟を受けたこと、同行していた兄弟が、6カ月かけて到着したゴアで亡くなることまで記されている。残りは記述者本人が中国宣教に従事していたためか、中国布教の状況の記述が3ページにわたり記述されている。最後の1ページで、徳川家康没後の日本での迫害の様子³、長崎で殉教した4名の宣教師、20名の信徒のことが触れられている。

『北極から日本/中国などへ向かう航海の短い話 三つの体験で説明し、証明したもの』(1676) カタログ1519番 英語からドイツ語への翻訳 Johan NaumanとGeorg Wolff発行(ハンプルク)

インド航路を通じてアジア、特に中国や日本に至る航海が当然であった時代に、北極海経路でごく短い期間にアジアに達した経験をもつとされるオランダ人船乗りからの聞き書きなどを内容としている。北極航路の存在否定に対する反駁としては、(1) アムステルダムから北極への航海、(2) 日本から北極への航海、(3) モスクワ大公が指示して試みたことにより、ノヴァゼン

ブラの北方に日本、中国等に至る海が存在するなどの経験談が、北半球の地図とシベリア北部の地図を添えて述べられている。話の根拠として、北極から8度以内に陸地が無いことや、グリーンランドに行く船のオランダ人航海士の話が挙げられているが、これが22年前のアムステルダム飲み屋での会話という説明である。大陸と海洋とでの気温の相違など、一応何点か似非科学的な理屈でこの航路の存在に信ぴょう性を持たせようとした内容である。

2 ニュース媒体としてのパンフレット？

前章では、江口（2019b）で紹介した思想・信仰上の主義主張を内容の中心においたパンフレットとは明らかに異質のものをいくつか紹介した。まず紹介したパンフレットの選択の問題について確認しておきたい。ここで取り上げたのは、すべてフランクフルト大学所蔵のフライタークコレクションに含まれるもので、しかも、16世紀と17世紀の重大事件と考えられるテーマで閲覧できたものとデジタル化して入手可能なものという基準でごく一部を選択している。そもそもフライタークコレクション自体や現存するパンフレット総体も当時刊行されたパンフレットの全体像を反映したものであるとは断じることができない。また仮にそうした制約下でも、本来一つのテーマ・事件について現存するすべてのパンフレットを横断的に検討するべきであろうが、それは多くの文書館等の現地調査を繰り返すことで始めて可能となろう。そうしたサンプル例の問題点を承知のうえで、あえていくつか気付いた点を挙げてみる。

対立抗争を背景とした事件報告等のパンフレットの場合、「何が起こったのか」という内容以外にも、事件に対する立場による党派性を示す要素が含まれる。例えば、ユグノー戦争やケルン戦争ではカトリック側に立つのか、プロテスタント側に立つのかという問題がある。日本に関するパンフレットでも、イタリア語から翻訳されたイエズス会報告であることから当然カトリック宣教の成果を強調する側面が強く現れることは否定しがたい。そうした要素はあるものの、やはり「誰が何を、何時、何処でどうしたのか」という事実関係の記述自体にも新たな情報としての意味がある。ただそれを現在の感覚でとらえるニュース報道と同一視するには言語的、社会文化的な基準を立てねばならないだろう。また、事実関係の記述ではあっても、日本に関するパンフレットの多くやユグノー戦争に関するものの場合、いわば「お話」ととらえることもできよう。つまりストーリーであり、語りでもあり、その延長線上には文学が想定されると言うこともできよう。両者の相違は最新の出来事を報じているか、すなわち即時性を満たしているか否かかもしれない。その際の即時性に現代の感覚を持ち込んでも意味はないだろう。日数という次元よりも、月数や年数のスケールでしか即時性を捉えられない時代であることを踏まえるべきだからである。

3 パンフレットの価格について

パンフレットの定義として、「最新の出来事に関して、公共上アクセス可能な、すなわち対価を支払って購入でき、印刷された冊子の形態で頒布される」もの（Wilhelm 1996, 1）というものもあれば、「最新の出来事が広範な住民諸集団にもアクセス可能な言語的、テキスト的形式にまとめられた」もの（Wilhelm 1996, 1）という指摘もある。こうしたパンフレットに対して当時の人々があえてどれほどの対価、出費を支払ったのだろうか。

パンフレットの価格について、江口（2019b）で「判明していることは多くはな」く、宗教改革初期にあたる「1515年から1525年の間」で、およそその基準値として「4葉8ページのもの一部で1プフェニツヒ3ヘラー、6葉12ページのもの一部で2プフェニツヒ、8葉16ページのもの一部で3プフェニツヒ、10葉20ページのもの一部で4プフェニツヒ」（Schwitalla, 同上, 31）という総括的な記述を引用した。しかし、その後先行研究をさらに調べていくと、19世紀以来いくつかの研究や報告の存在に突き当たった。例えば、奇しくも宗教改革者と同姓のJohannes Luther（1905）は、宗教改革期の書籍を含む印刷物について、発行当時の価格と20世紀初頭の古書店での取り扱い価格との関係を論じようとするなかで、16世紀当時の販売価格も論じている。ただし、個々のパンフレットの版（重刷や海賊版が多かったため）の特定が困難だったことが一つの障害となったことを指摘している上、そこで記録されている価格がパンフレット流通のどの段階（印刷業者、発行者、書籍商に代表される印刷物販売業者、最終的な読者などの制作・販売プロセスを想定して）での価格なのか特定できていない。そして、当時の価格とされるものについても、20世紀初頭時点での対応する貨幣価値を容易に確定できない困難にも触れているが、これは時代がさらに下った現在にも通じる問題である。Johannes Lutherが刊行時点での印刷物の販売価格で考慮すべき点としたのは、制作費、制作地及び運送費、そして人気（「人気のある書籍は値段が高く設定された」）の三点である。当然のことながら定価は存在しない（Luther 1905, 25）。印刷物の価格については、Johannes Lutherはまずライプツィヒで1884年に刊行されたデューラーの『ネーデルラント旅日記』の中の印刷物価格を挙げている（デューラー2007, 81, 93, 94, 101, 103, 122参照）。

1520年8月27日以降のブリュッセル滞在中

『ティル・オイレンシュピーゲル』2部に 1シュトゥーバー

1520年9月3日以降の第2回アントワープ滞在中

（ルターの）『condemnation』と『対話集』に 2シュトゥーバー

1520年10月1日 宗教論争パンフレット（部数不明、複数）に 3シュトゥーバー

1520年10月28日以降のアーヘンからケルンへの旅行中

ルターのパンフレット1部に 5ヴァイスプフェニヒ

ルターの『condemnation』に 1ヴァイスプフェニヒ

パンフレット1部に 1ヴァイスプフェニヒ

1520年12月14日以降の第4回アントワープ滞在中

パンフレット2部に 2シュトゥーパー

*Dürer, A. (発行年不明) の記述でTraktat/Traktätleinをパンフレットとして扱った。

デューラーの『ネーデルラント旅日記』の解説で、前川誠郎は日記の記述中に登場する通貨について以下の換算値を挙げている（デューラー2007, 200）。

1 (ライン) グルデン(Gulden)=20ヴァイスプフェニヒ (Weißpfennig)/

24シュトゥーパー (Stüber) / 40ヘラー (Heller) / 252プフェニヒ (Pfennig)

さらに、日記に記載された「ローストチキン一羽10プフェニヒ」を2007年当時の日本円2,000円とみなした現代日本での試みの換算値を示している。仮にこれを前提に計算すれば、1プフェニヒが約200円、1シュトゥーパーが約2,100円、1グルデンが約50,000円となる。

デューラーの記述自体は貴重な情報ではあるものの、誰から、どの著作のどのような版のものを購入したのかは不明である。Johannes Luther自身「書籍の確定は不可能である」と述べている。しかも部分的にはアントワープが購入地となっている。また、デューラーの支出記述だけでなくJohannes Lutherのそれ以後にある他の記述でも「書籍 (Bücher)」、「印刷物 (Schriften)」、「パンフレット (Traktat)」が特に注意深く区別されている様子も見られない。例えば、Andreas Althamerという人物が、ペストの発生により親元に戻されるまで、1529年11月2日から1532年11月14日までの期間、知人の息子を預かった。その間の支出についての記載がやはり1905年にTh. Koldeという教会史研究者に報告されている (Luther 1905, 350)。残念ながらパンフレットと推定されるのは、エラスムスの著作『De civilitate』だけと思われる。

〈1529年〉・フィリップス文法書 4クロイツァー

・ドイツ語公教要理 6プフェニヒ ・ラテン語公教要理 30プフェニヒ

・聖歌集 16プフェニヒ ・Donatus文法書 5クロイツァー

・エラスムスの『文化的恣意としての礼儀作法』 9プフェニヒ

〈1531年〉・ラテン語聖書 5バツツェン

・イソップの寓話集 23プフェニヒ

〈1532年〉・Mosellanusの『小児学』 10プフェニヒ

*1グルデン=15バツツェン/60クロイツァー/240プフェニヒ (16世紀の換算) 因みに、ここでは靴の購入価格も記録されており、その値段は安いもので一足21プフェニヒ、最も高価なもので40プフェニヒ、平均で一足あたり約30プフェニヒとなる。

これとは別にJohannes Lutherが引用している印刷物の発行時の価格のヒントとなる記録が、ツヴィッカウという都市の参事会図書館に所蔵されていたStefan Roth宛ての手紙である。この人物は都市書記であったが、それ以前にラテン語学校の校長、書籍商も経験している。直接これを調べたのはBuchwald (1893) で書籍史研究専門誌に報告している⁷⁾。Johannes Lutherはそのうち19件の価格と対象を紹介している (Luther 1905, 351f.)。ここで挙げられ

►7 Buchwald, G. (1893) Stadtschreiber M. Stephan Roth in Zwickau. In: *Archiv für Geschichte des deutschen Buchhandels* 16, 6-246.

ているものは、聖書、新約聖書、公共要理など書籍のカテゴリーに入るものも多く、グロシェン、グルデン単位の価格が目につく。それ以外でもパンフレットだと明確に確定できるものが(価格の点からも)ほとんどないと考えられる。

パンフレットの刊行時の価格については、むしろClemen (1898及び1925)の報告に例が多い。Clemenは、ツヴィッカウの市参事会学校の図書館に所蔵された24点のパンフレットについて、手書きで「購入経路、プレゼントされたものか、購入されたものか、購入の場合はその値段」などが記されていたと報告している(Clemen 1925, 147)。先行する調査でClemen (1898, 520)は、この合本に含まれたパンフレットは「ザクセン選帝公領のカトリック聖職者が所有」したものだとしている。29点のパンフレットのうち価格が記録されている24点をまとめたのが補遺Aであり、小論ではツヴィッカウサンプルとする。このサンプルの特徴は、パンフレットの発行時期が1518年から1520年(1点のみ1522年)に集中している点である。

パンフレットの価格についてもう一つ重要な情報源となる報告がある。それが³、Brecht (1972)で報告されているテュービンゲンでの調査である。ここで扱われているのは、テュービンゲンのプロテスタント神学校図書館に所蔵されている合本の1冊であり、総計32種類の印刷物が収められているが、印刷年不明のものを除けばほとんどが1515年から1525年の10年間に刊行されている。これらの印刷物のうち18点には、手書きの「価格と購入の日付記載」がある。この書き込みについては、ドイツ語で書かれていること、パンフレットはヴィッテンベルク、ニュルンベルク、アウクスブルク、ストラスブールで印刷されていること、パンフレットの著者は南ドイツに偏っていること、購入者の名前はP. Haug (イニシアルがP. H.) だという点などである。それ以外のパンフレットの一部では最終葉が欠けていることもあり、価格等の情報は見られない。この印刷物の合本を便宜上テュービンゲンサンプルと呼び、Brechtによる内容説明を補遺Bとしてまとめた。

こうした研究も踏まえて、Köhler (1987, 324f)は、パンフレットの価格について1987年当時で判明している点をまとめている。「いくつかの現物には手書きの書き込みがあ」り、それは「かつての所有者が買い取り額を記した」ものである。ただしKöhler (1987, 同上)は、その金額が「一般化するのが困難である」ことも同時に認めている。Köhler (1987, 325)が⁴パンフレットの平均的な価格として示しているのは、「印刷全紙一枚当たり1プフェニヒから2プフェニヒ」である。そのうちの2プフェニヒの単価に基づけば「四つ折り版16葉という平均的な規模のもので約8プフェニヒとなる」。

8プフェニヒという価格のもつ購買力についても、「きわめて慎重に見ることを前提に」、対応するものが挙げられているが、それは「手工業職人の一日の賃金の三分の一、鶏一羽、牛肉1キロ、蝋燭1ポンド、(農作業用の)堆肥用フォーク1本」、「分厚い小説1冊、良質な装丁の実用書」とされている(Köhler同上, 325および注53)。ここで先に引用したデューラーの『オランダ旅日記』にある記載と比較すると思わぬ一致のあることに気づく。「ローストチキン一羽」と「鶏一羽」という表現の違いはあるものの、片や10プフェニヒ、もう一方では8プフェニヒとされている。あるいは差額の2プフェニヒはロー

ストしてあるか否かの手間賃かとも想像できる。これ以外にパン（量は記載されていない）に対して2プフェニヒと4プフェニヒという記載もある（デューラー2007, 32および49）。ローストチキンを食すことのできる経済的余裕があればパンフレットが購入できたというように解釈も可能である。

ここまでの先行研究で取り上げられたパンフレットはその多くが1520年代のものである。ニュース媒体に類似するものとして紹介したパンフレットは、事件発生時期から1580年代前後が多く、遅いものは1670年代とされている。当然、100年以上の時間差が販売価格にも影響することを考慮する必要がある、物価比較も容易ではない。

4 新聞とパンフレットや他の印刷物との 関連について

パンフレットがプロパガンダや言語的要求の機能をもつことが、地下水脈のように新聞の論評機能につながったのかもしれないと推測もできるが（江口2019b）、情報伝達が主たる機能と考えられるタイプのパンフレットの場合は、新聞成立のプロセスの中でどのような役割を果たしたと考えればよいだろうか。最初にパンフレットと新聞の相違を構成している点に着目したい。それは新聞のもつ定期性（Periodizität）である。パンフレットには定期性は認められない。しかし、イタリアで刊行されたパンフレットについて興味深いケースが報告されている。

Wilhelm（1996）は、16世紀前半のイタリアでのパンフレットの機能の変遷をイタリア語史とテキストのジャンル史という視点から整理しようとした。ドイツとは異なり、同時代のイタリアでは宗教論争を背景としたプロパガンダのようなテキスト類型はごく少数で、少なくとも表面上は情報伝達のテキスト類型が多いとされている。Wilhelmは、民衆向け、通俗的パンフレットのイタリア語名としてavviso/avvisiを使用し、教養的、文学的historiaからの移行と社会文化的差別化とを論じている。このavviso/avvisiは、とくに16世紀後半以降に郵便制度に乗ってヨーロッパに拡散したニュースを表す言葉と同じものである。厳密には、イタリアで印刷されたパンフレットはavviso/avvisi a stampaと呼ばれ、手書きの通信・手書きニュースの意味ではavviso/avvisi a manoと区別する。さらにWilhelm（1996, 251）は、パンフレットの一種としてのavvisi、すなわち印刷されたavvisiがイタリアでの先行研究で新聞の先行形態と考えられていることを紹介し、新聞の構成要件のうち（1）速報性、（2）公共性、（3）印刷形態という三要件を満たし、ただ定期性のみ欠けると指摘する。そして定期性についても、そのいわば萌芽として連続性を示す例として1546年8月、9月、10月に発行された総計10種類のパンフレットを紹介している。Wilhelm（1996, 255f.）は、連続性が成立する条件として、同一のテーマ（シュマルカルデン戦争）、比較的短い発行の時間間隔（ほぼ10日間隔）、同一の印刷人もしくは編集人（Girolama Cartoraliという女性の印刷人）を挙

げている。さらには、連続ものとしてのパンフレットには、後続のパンフレットを購読することで情報の充足を読者に納得させ、言語表現上も明らかに先行するパンフレットと後続するパンフレットとの「繋ぎ」を取り込むことで販売戦略的な仕掛けも与えられている。ただし、ここに述べたパンフレットのシリーズものという現象は古くSchottenloher (1985, 166) ですでにドイツ語圏の複数のチラシとしてのNeue Zeitungの例が複数 (1566年と1594年のハンガリーでの対トルコ戦役、1587年のユグノー戦争がテーマ) 紹介されている通りである。ただし、Schottenloherが挙げているFlugblatt (通常チラシを訳語とする表現) は明らかに複数ページであることが読みとれ、形態上の概念としてのパンフレットとチラシが混在している。因みにイタリアで定期性を満たす印刷新聞はgazzetteの名で、ジェノヴァで1639年、ローマで1640年、ミラノとボローニャで1642年に販売が開始されている (Wilhelm同上, 251)。

手書き通信 (avvisi a mano) がイタリアからドイツを含むヨーロッパに広まったのに対して、印刷を通じて多数の読者に頒布する形態をJohann Carolusが1605年に実現することで印刷新聞が始まったものの、イタリアでは印刷された形態の新聞はしばらく制作が禁止されていたため、その間手書きニュースだけが流通していた。

Wilhelm (1996, 255f.) の議論を踏まえて、改めて小論で紹介したドイツ語圏のパンフレット例を検討すると、それらは手書き通信同様最新の出来事を知らせるという側面もあると同時に興味深い出来事や他国の事情や事件を語り伝えるという面もある。それは物語り文学のもつ一面としての娯楽性が情報伝達と一体化したもの、あるいは両者が未分化のもので、現象的にはインフォテインメントという現代流の表現にも思い至る。ニュース分析でもナラティブ分析という手法がとられることも、この二つの現象の共棲関係を示しているのかもしれない。いずれにしても外形としてのパンフレットには多彩な中身が盛り込まれるというのは、同じ日常的印刷物としての一枚刷りもしくはチラシという印刷物の場合と変わらない。

流通する情報が、情報チャンネル自体のもつ性格やそれぞれに想定される受容者の社会的特性によって変異することは当然あるであろう。チラシはイラストを多用することで非識字者も受容対象に含めている。比較的長文のテキストで構成されるパンフレットの場合、識字能力は一次的読者には前提とされる。当然そこには詳細な言語記述があり、チラシのもつ強烈だが画一的なインパクトとは違った形で、受容者が個人レベルで言葉から事件のイメージを頭のなかに創り上げるプロセスが生まれるともいえる。それは個人ごとのイメージの相違を前提にした新たな議論の土壌を醸成したかもしれない。

参考文献

- 江口 豊 (2014a) 「ドイツ語圏における新聞の前身形態について」 (研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 66, 59-71.

- (2014b)「活版印刷術の展開と新聞成立との関連について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 66, 1-22.
- (2018)「近世神聖ローマ帝国におけるチラシについて」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 27, 111-128.
- (2019a)「新聞成立期における新聞受容の前提について」(研究ノート)
メディア・コミュニケーション研究 72, 96-108.
- (2019b)「近世ドイツ語圏におけるパンフレットについて」(研究ノート)
国際広報メディア・観光学ジャーナル 29, 103-120.
- Brecht, M. (1972) Kaufpreis und Kaufdaten einiger Reformationsschriften.
Gutenberg-Jahrbuch, 169-173.
- Clemen, O. (1898) Mitteilungen aus und über Bibliotheken
Zentralblatt für Bibliothekswesen, Jahrgang 15, 12. Heft, 520-522.
- Clemen, O. (1925) Die Bücherpreise um 1520. In: Aloys Ruppel (Hrsg.)
Gutenberg-Festschrift, Mainz, 147-151.
- Köhler, H.-J. (1976) Flugschriften. Versuch der Präzisierung eines geläufigen Begriffs.
In: Rabe, H./Molitor, H./Rublack, H.-Ch. (Hrsg.) *Festgabe für Ernst Walter Zeeden: Zum 60. Geburtstag am 14. Mai 1976*. Aschendorff. S.36-61.
- Köhler, H.-J. (1981) Fragestellungen und Methoden zur Interpretation frühneuzeitlicher
Flugschriften. In: Hans-Joachim Köhler (Hrsg.) *Flugschriften als Massenmedium der
Reformationszeit*. S.1-27.
- Köhler, H.-J. (1986) Erste Schritte zu einem Meinungsprofil der frühen Reformationszeit.
In: Volker Press/Dieter Stievermann (Hrsg.) *Martin Luther. Probleme seiner Zeit*. S.244-281.
- Köhler, H.-J. (1987a) Die Flugschriften der frühen Neuzeit. Ein Überblick.
In: Werner Arnold (Hrsg.) *Die Erfindung der Buch- und Bibliotheksgeschichte in Deutschland*.
S.305-345.
- Köhler, H.-J. (1987b) „Der Bauer wird witzig“. Der Bauer in den Flugschriften der
Reformationszeit. In: Peter Blickle (Hrsg.) *Bauer und Reformation*, Bd.1., S.187-218.
- Luther, J. (1904) Die Preise der Lutherdrucke im deutschen Antiquariatsbuchhandel.
In: *Zentralblatt für Bibliothekswesen*, Jahrgang 22, Heft 8. 349-371.
- Moeller, B. (1983) Flugschriften der Reformationszeit.
In: *Theologische Realenzyklopädie* Bd.XI, S.240-246.
- Schottenloher, K. (1985) *Flugblatt und Zeitung. Ein Wegweiser durch das gedruckte Tages-
schrifttum*. 2 Bde. (Neu herausgegeben, eingeleitet und ergänzt von Johannes Binkowski)
Klinkhardt & Biermann, München. (Original 1922)
- Schwitalla, J. (1999) *Flugschrift*. Max Niemyer Verlag, Tübingen.
- Wilhelm, R. (1996) *Italianische Flugschriften des Cinquecento (1500-1550)*.
Max Niemyer, Tübingen.

■補遺A ツヴィッカウサンプル (Clemen 1925の記述を表に作成)

No.	刊行年/著者/印刷人/印刷地	タイトル/紙の枚数	価格
1	言及なし	Acta lipsiae Resolutiones Lutherianae ... 枚数不明	3 Groschen
2	1519年/?/Melchior Lotther /ライプツィヒ	Resolution Lutheriana super prepositione decima tertia 28葉	2 Groschen
3	1519年/?/Melchior Lotther /ライプツィヒ	Contra malignum Johannis Eccii iudicum 16葉	10 Groschen
4	1519年/?/Melchior Lotther /ライプツィヒ	In epistlam Pauli ad Galatas 82葉	3 Pfennig
5	1519年/?/Valentin Schumann/ライプツィヒ	In epistlam Pauli ad Galatas para- phrasis per Erasmus ... 21葉	4 Pfennig
6	1519年/?/Martin Landsberg/ ライプツィヒ	Solutiones ac responsa wit. Docto- rum in publica disputatione ... 10葉	6 Pfennig
7	発行年?/Johannes Oekolampad/?/?	Canonici indocti Lutherani 6葉	3 Pfennig
8	1519年6月/?/Mattihias Schüler/ストラスブール	Erasmi Rotterdami laus stultitiae 70葉	5 Groschen
9	1520年/?/Rhau-Grunenberg/ ヴィッテンベルク	Erasmi Rotterdami epistlae 26葉	3 Pfennig
10	1519年/?/Martin Landsberg/ ライプツィヒ	A venatione Luteriana Aegocerotis assertio 22葉	5 Groschen
11	1519年/?/Melchior Lotther/ ライプツィヒ	De ratione disputandi Petri Mosellani oratio 16葉	16 Pfennig
12	1518年/?/Jakob Thanner/ ライプツィヒ	Beati Joannis Chrysostomi sermo de mala et bona muliere pulcherrismus 8葉	1 Groschen
13	1518年/?/Wolfgang Stöckel/ライプツィヒ (推測)	Vollständige Ausgabe der deutschen Theologie 40葉	6 Groschen
14	1519年/?/Joh. Grunenberg /ヴィッテンベルク	Sermo de duplici iustitia Castigatus 4葉	4 Pfennig
15	1520年/?/Wolfgang Stöckel/ライプツィヒ	Ein Sermon von dem heiligen hoch- würdigen Sacrament der Tauffe 8葉	6 Pfennig
16	1520年/?/Valentin Schumann/ライプツィヒ	Vorclerung Doctoris Martini Luther 4葉	1 Groschen
17	1520年/?/Valentin Schumann/ライプツィヒ	Großer Sermon von dem Wucher 16葉	2 Groschen
18	1519年/?/Valentin Schumann/ライプツィヒ	Kleiner Sermon von dem Wucher 4葉	6 Pfennig
19	1520年/?/Joh. Grunenberg /ヴィッテンベルク	Eyn Sermon von dem Elichen standt vorendert und corrigiret 4葉	4 Pfennig
20	1519年/?/Joh. Grunenberg /ヴィッテンベルク	Eyn Sermon von dem Ablass 4葉	4 Pfennig
21	1519年/?/Melchior Lotther/ライプツィヒ	Eyn Sermon von der bereytung czum sterben 10葉	4 Pfennig
22	1519年/?/Melchior Lotther/ライプツィヒ	Eyn Sermon von der Sacrament der puss 8葉	1 Groschen
23	1520年/?/Wolfgang Stöckel/ライプツィヒ	Eyn Sermon von dem gepeet vnnd procession 4葉	3 Pfennig
24	1519年/?/Wolfgang Stöckel /ライプツィヒ	Ein Sermon geprediget tzu Leipszgc 4葉	4 Pfennig

No.	刊行年/著者/印刷人/印刷地	タイトル/紙の枚数	価格
25	1519年/? /Wolfgang Stöckel /ライプツィヒ	Economium Rubii Longipolli 8葉	1 Groschen
26	1519年/? /Wolfgang Stöckel /ライプツィヒ	Nullus Lipsensis respondet Nemini Wittenbergensi 4葉	4 Pfennig
27	発行年? /Ulrich Hutten? / ? /?	Pasquillus Cirvs Pasquillo 4葉	4 Pfennig
28	発行年? /? /? /?	Drey ding fynd man tzu Rhom wye das buchlyn Czeygeth an 4葉	3 Pfennig
29	発行年? /? /? /?	Tractatus de pestilentiali Scorra sive malo de Franzos compilatus... 12葉	10 Pfennig

■補遺B テュービンゲンサンプル (Brecht 1972で価格表示のあるものを表に作成)

No.	刊行年等/著者/印刷人/ 印刷地	タイトル/ページ数もしくは 紙の枚数	購入日/ 購入者情報	価格
1	1517年1月19日/ /Johannes Staupitz/ Friedrich Peypus/ ニュルンベルク	Von entlicher Vollziehung ewiger Fürsehung *Scheurlの著作の独訳 *タイトルページ欠け	1517年8月10 日/P. Haug	8 Pfennig
2	1517年/Sixtus Tucher/ Friedrich Peypus/ ニュルンベルク	Vertewtschung virzigh latei- nischer Christenlicher sendt- brive: ... *タイトルページ 欠け 53ページ	1517年3月2 日/署名無し	4 Schilling
3	1520年11月/Martin Luther/Jörg Nadler/ アウクスブルク	Sendbrief an Leo X. 8葉	1521年3月26 日/P. H.	3 Pfennig
4	1522年4月/? / Aegidius Fellenfürst/ コーブルク	Newe ordnung der Stat Wittenberg ... 8葉	1522年8月5 日/P. H.	3 Pfennig
5	1517年1月19日/? / 印刷人名無し/印刷地無し)	Ernstlich handlung der Universitet zu Wittenberg 12葉 (最終葉は空白)	1522年10月 11日/P. H.	4 Pfennig
6	1520年9月28日以降/ Ulrich von Hutten/ Martin Flach/ ストラスプール	Ein Klagschrift ... 10葉	1520年12月1 日/P. H.	3 Pfennig
7	1520年/Martin Luther/ Rhau-Grunenberg/ ヴィッテンベルク	Warum des Papstes und seiner Jünger Bücher verbrannt sind 8葉	1521年3月26 日/P. H.	3 Pfennig
8	1521年/? /Knobloch/ ストラスプール	Die verteutschen Text aus den Bebstlichen Rechten: und vil andren glaub- würdigen geschriften ...	1522年3月15 日/P. H.	1 Pfund
9	1521年6月24日 (献辞の日 付) /Urbanus Phoeni- ceus/Grimm u. Wirsung/ アウクスブルク?	Anzaygung daß die Romisch Bull mercklichen schaden in gewissin manicher menschen gebracht hab und nit Doctor Luthers leer	1522年1月3 日/P. H.	8 Pfennig
10	1520年/Martin Luther/ Jörg Nadler/ アウクスブルク	Appelation oder Berufenen ein christlich frei Concilium 4葉	1521年3月26 日/ 署名無し	3 Heller
11	1520年/Martin Luther/ Melchior Rammingen/ アウクスブルク	Von den neuen Eckischen Bullen und lügen	1521年3月26 日/P. H.	3 Pfennig

No.	刊行年等/著者/印刷人/ 印刷地	タイトル/ページ数もしくは 紙の枚数	購入日/ 購入者情報	価格
12	? /Hans von Gmündt Kolb/ ? / ?	Ein Reformation notturftig in der Christenheit mit den Pfaffen und jren Maegten ... 4葉	1522年10月4 日/署名無し	3 Heller Francisci
13	1525年1月4日（綴じた日 付?）/Johannes Bughenagen/? / ?	Ein Sendbrief über ein Frag vom Sakrament, Item ein Unterricht ... 4葉	1525年3月28 日/P. H.	1 Pfennig
14	1522年/? / ? / ?	Ein sendbrief, so der Edel und Ernvest Franciscus von Sickingen, seinem schweher, dem Edlen und ernvesten juncker Diethern von HenschBuchßheim ...	1522年10月4 日/P. H.	3 Pfennig Francisci
15	1522年夏/ Ulrich von Hutten/ ? /ストラスブール	Vermahnung an die Freien und Reichsstädte deutscher Nation 6葉	1522年10月 11日/P. H.	2 Pfennig
16	1523年? / ? / ? / ?	Der Ritterschaft brüderliche Vereinigung, Gesellschaft oder Verstentnus, jüngst zu Laudau ... uffgericht	1522年10月 11日/P. H.	2 Pfennig
17	1524年? / ? / J. Gutknecht/ ニュルンベルク	Artickel un ursprung der wal- densen- und der armen von Lugdun, auch Joannis wiclef- fen, und Joannis Hussen 8 葉	1523年10月9 日/P. H.	3 Pfennig Dionisii

(令和2年5月21日受理、令和2年9月23日採択)